

## バイカル湖湖底堆積物 VER99G-12 コアの最終氷期後期以降の花粉分析結果

志知幸治（森林総研東北）・河室公康（森林総研関西）・渡邊隆広・中村俊夫  
（名古屋大）・長谷義隆（熊本大）・高原 光（京都府立大）・谷 幸則（静岡県立大）・  
河合崇欣（名古屋大）

バイカル湖の湖底堆積物やその周辺陸域の湿原堆積物の花粉分析により、バイカル湖周辺の最終氷期最盛期以降の植生変遷は明らかにされてきている（三好ほか，1999；Takahara *et al.*，2000；Bezrukova *et al.*，2005；Denske *et al.*，2005 など）。しかし、バイカル湖の集水域は約 54 万 km<sup>2</sup> と広大であり、周辺の植生を復元するためにはさらに多くの地点で分析を進める必要がある。また、最終氷期最盛期以前の花粉分析結果は少ない。本研究ではバイカル湖南部のブグルジェイカ沖（N 52° 31' 40"，E 106° 09' 03"）で掘削された湖底堆積物（VER99G-12 コア）を用いて最終氷期後期以降の花粉分析を行った。

VER99G-12 コア（4.65m）は全層を通じて粘土質であるが、珪藻を多く含む層準もみられる。コアの放射性炭素年代はこれまでに 8 試料が測定されており、深度 4.0m で 23654 ± 91 yr. B.P. の結果が得られている。各深度における年代値は、この放射性炭素年代の測定結果から算出した。花粉分析は約 100 ~ 150 年間隔で合計 220 試料について行った。

花粉分析の結果から、以下の 7 局所花粉帯に分帯した。

B1：26000 ~ 21000 yr. B.P. ヨモギ属，タンポポ亜科，カヤツリグサ科などの草本花粉が高い割合で産出する。

B2：21000 ~ 17000 yr. B.P. 草本花粉がわずかにみられるのみで、ほとんどの層準で花粉含有量は 100 個 cm<sup>3</sup> 以下に減少する。

B3：17000 ~ 15000 yr. B.P. ヨモギ属やカヤツリグサ科などの草本花粉の割合が高いが、次第にその割合は低くなり、代わって低木のカバノキ属（*Betula nana*-type）が増加する。

B4：15000 ~ 12000 yr. B.P. ヤナギ属およびトウヒ属が急増し、ヨモギ属などの草本花粉は減少する。

B5：12000 ~ 11000 yr. B.P. トウヒ属は減少し、ハンノキ属やカバノキ属などの広葉樹花粉が増加する。

B6：11000 ~ 7000 yr. B.P. モミ属およびカラマツ属が顕著に増加し、トウヒ属も再び増加する。五葉のマツ属が増加を始める。

B7：7000 ~ 2000 yr. B.P. 二葉および五葉のマツ属が優占する。

花粉含有量の少なかった B2 は最終氷期最盛期に対応しており、周辺流域の植生が極めて乏しかったと考えられる。B4 におけるトウヒ属およびヤナギ属の増加と、B5 におけるトウヒ属の減少は、バイカル湖周辺における既往の花粉分析結果からははっきりと示されていなかったベーリング・アレレード温暖期と、ヤング・ドライアス寒冷期にそれぞれ対応すると考えられた。B6 以降の変遷過程はこれまでの研究結果とほぼ同様の傾向であった。